



肉の申し子の誕生

私、大浦ミート2代目社長の大浦達也は昭和51年2月29日、4年に1度の肉の日に生まれました。一昨年息子が生まれたのですが予定日が3月中旬と肉の日を過ぎてしまいとても残念に思っていたのですが、息子は何と3月10日生まれ！肉ではなくミートの日(笑)これは決して偶然ではないですよ。

三代目として世界に羽ばたくべく生まれしてきた肉の申し子なのです。



三代目 莉輝(りき)くん 2歳

私の祖父は馬喰(ばくろ)う)をしておりました。馬喰とは牛や馬などの家畜の売買を仲介する仕事なのですが、祖父は中でもかなりのやり手だったようです。祖父は男3人女5人の子供を授かったのですが、男3人は全員肉屋さんを創業、女5人も全員お肉関係の方と結婚をしているのです。まさに肉まみれの肉一族です(笑)周りの人達からも「お前のお父さん達はみんな肉関係の商売で成功している。お前もその血をつけているのだからいわば肉業界のサラブレッドや！」と言われ続け幼少期を過ごしたのです。そういった環境でしたから中学2年の頃には、「社長になりたい」と漠然と考えるようになり

ました。

セルシオに釣られ事業承継

お肉屋さんになりたいと思っていた私なのですが、高校生の頃に「もつと儲かる仕事があるのではないか」と少し心が揺れたことがあります。その頃父から将来どうしたいんだ？と聞かれ「業種は問わず20代で社長になって大金持ちになる。」と答えたのです。すると父は「なれる方法あるで。」私が教えてと頼むと父は「わしの後を継ぐことや」と一言。丁度その頃トヨタから最高級セダンのセルシオが発売された頃で「わしな、もうセルシオ注文しとんねん。別にセルシオちゃうかってもベンツでもフェラーリでも明日買う気になれば買えるかなあだから町でフェラーリ見ても全然羨ましくない。あつ今乗ってるクラウンはお前にやるわ。」と。肉屋ってそんなに儲かるの？と思いつつ「じゃあ肉屋になるわ。お父ちゃんの後継ぐわ！」と即答し肉屋になることがあっさり決まりました。後にも先にも事業承継について話し合ったのはその時だけです。

大浦ほるもん店の始まり

高校生になった頃には裕福な暮らしが出来ていたのですが、私が幼稚園の頃にはおんぼろの長屋に暮らして自分の家が貧乏だと分かっていました。父は交通事故で足を怪我し身体障害者で無職で一文無し。駆け落ちして一緒にあった母も無職で一文無し。交通事故で入院をしていた父の同部屋に超お金持ちの社長がいたので、父に「お金持ちになりましたかったら人の嫌がること、やりたくないこと、をしなさいとアドバイスされたのです。父は入院中からそのことばかり考えていて、一番身近であった畜産関係の仕事の中で一番「人の嫌がること、や

りたくない仕事」を考えに考えた答えが当時「ほるもん」と言われていたホルモンです。(ほるもんとは関西弁で捨てるものという意味です)今こそホルモンという言葉が出来るくらい女性にも世間にも認められています。当時は臭い汚いという最悪のイメージ、そして業界的にもホルモン屋さんはお肉屋さんよりかなり格下のイメージでした。人気のなかったホルモンに目をつけたもう一つの理由は長く入院していたせいもあり手元には5000円しかなかったことでした。その軍資金5,000円で起業できる仕事は仕入れも安く出来るホルモンを行商で売る仕事しかなかったのです。この時私が2歳、大浦ほるもん店の始まりです。

ほるもん屋から精肉店へ

高校卒業後3年間大阪でお肉の修行をした後、21歳で株式会社大浦ミートに入社をしたのですが「二代目」とか「若」とか言われるのが大嫌いでした。修行中も毎日毎日仕事のことだけを考え、成果も出していたので二代目だけとその辺の二代目と一緒にするなよ！という気持ちで凄く強かったです。入社したのは平成9年、当時の大浦ミートは売上が3〜4億、従業員はパートさんを入れて10名ほど、ホルモンをメインにした食肉加工、小売、卸事業がメインでしたが、営業が得意な私が帰ってきたからには最も弱かった卸部門を一番にしてやると意気込み、朝から晩まで仕事をしていました。

この頃大浦ミートに最大の転機が訪れました。私はホルモン専門店から精肉店への転身を決意したのです。この業界では画期的なことなのですが、決意したポイントは国産牛という分野は「中小企業が大手に唯一勝てる所」だからなのです。というのも、輸入牛の場合は商社や

メーカーを通すのですが、国産牛の場合は中小店の私でも大手企業でも横並びで仕入れが出来るのです。国産牛は仕入単価も製品化のコストも他社と同じ、努力でコストを下げれば販売価格を安く出来る。ここなら勝てる確信し精肉店へ転身したのです。

運と勘と縁と勢いで事業急拡大

事業承継の経緯から和気あいあいとした父との関係を想像されると思うのですが決してそんなことはありません。イケイケどんどんで売上重視の私と慎重で利益重視の父、方向性の違いから度々対立をするようになりました。どこでもそうなのでしょうが、父親と一緒に仕事をすると喧嘩をばかりになり数年間話もしない状態になりました。そんな頃父が「もうお前も一人立ち出来るやろ、わしは大浦ミート辞めて独立する。」と言って会社を去りました。

平成17年私は念願の社長になったのです。そこから私の快進撃が始まりました。社長になり新しいことにチャレンジしたかった私は牧場を手掛けたり、肉のディスプレイ販売、小売店出店、海外展開と次々に新規事業を手掛けたので

